

去年の春、結婚してずいぶんになるお隣の山田さんちのお嫁さんが、こともあろうに猫を生んだというので、みんなびつくり仰天してしまった。初めは、町内の連中が寄るとさわるとその話でもちきりになった。

「へえ、あの人が猫を生んだの」

「どうやって育てるんだらうね」

「人間のおっぱいで猫がちゃんと育つのかしら」

「どうせまともな猫に育つわけないから、いまのうちに保健所にもっていったらどうか」  
これはいくらなんでもひどすぎる。なんといっても、もう生まれてしまったいのちではな  
いか。

山田さん夫婦はといえば泣いてばかりいて、お隣からは、どうしてこんなことになったのかと、責任を互いになすりつけあって大喧嘩をする声が、しょっちゅう聞こえてきた。  
長いこと待ち望んだあげくに生まれてきた子が猫だったうえ、もう八十になるおばあちゃん  
が半分惚けかかっていたから、よけいに気が沈んでしまったらしい。

けれども夫婦はだんだんに、この未曾有のシヨック状態から脱していった。一時は一家  
心中も危ぶまれていたが、猫が生まれて三週間もしないうちに、ふたりの表情には本来の  
明るさが戻ってきた。これは、意外なことに、惚けかかったおばあちゃんのひとことがき  
っかけになったという。

「この猫のどこが悪い？ この子は、神様に好かれとる。それは確かなことじゃ」

山田さんは、もう猫を隠さなくなった。それまでは、暗い家の奥に閉じ込めていたのだ  
った。柿の木が葉を茂らせた中庭に出して、遊ばせたり日光浴をさせるようになった。私  
はみんなから好奇心まるだしの目で、「お隣の猫ちゃん、どんな様子なの」と訊かれたも  
のだが、半年もしないうちに通りを歩き回るようになったから、いまでは誰もがその  
姿を見知っている。黒地に喉元と手足の先だけが白い猫だ。しつぽは長くまっすぐに伸び  
ている。首にりんりん小さく鳴る金の鈴をつけて、女の子だから、名前はミイ。

ミイは幼稚園にも行かないし、運動会や遠足などとも無縁だ。山田さんの奥さんは、  
「子供のお弁当に卵焼きを入れてやることができる親がうらやましい」とたびたびこぼし  
ていたが、買い物に行けば、近所のスーパーで、ミイの大好きなカツオブシやマグロの刺  
身などを熱心に選んでいる彼女がいた。旦那さんは旦那さんで、文字通りの猫可愛がり。  
趣味の釣りから帰ってくると、まっさきにミイのために魚をさばいてやるし、ミイが甘え  
て飛びついて、スーツのズボンに爪をひっかけても、ただ目を細めて笑っているだけだ。  
おばあちゃんときたら、とうとう惚けが進んだのか、縁側に座っては、そばで丸くなって  
いるミイに話しかけてばかりいる。

「ミイや、お空は広いねえ」

猫は耳をぴくりとさせる。

「ミイや、お空はどれくらい遠くにあるんだらうねえ」

猫はひとつあくびをして、そろえた前足のつえにぼちんとあごをのせて寝てしまう。

人から生まれたといっても猫だから、ミイには何もできない。前足でふすまは開けても、  
閉めたためしはないし、食事のあと、自分の皿をきれいに洗うこともしない。ミイ、と呼

べば返事をするけれど、じつは算数も国語もわからない。木登りは上手だが泳ぐのは苦手らしく、どうなだめすかしても、水に足をつけようともしない。敏捷で、毛並みもつやつやし、なかなかの美人猫には違いないが、それでもお使いひとつまかせられない。

この子はなんの役にも立たないから、と山田さん夫婦は、しつだけけはしつかりとしたようだ。社会の役に立つことができないなら、せめて皆から好かれるようになりなさいと中庭でいつもミイを相手に諭していたものだ。そのせいなのかミイは、よその家に黙って上がり込んだりしないし、ましてや花壇をほじくり返してフンをしていったりということもない。通りを歩いていて、誰がミイ、と呼んでも、しつぽをびんと立てて足元にすり寄ってきた。最初は「猫なんて」と眉をひそめていた人も、お行儀がよく愛敬のあるミイの仕草に、思わず口元をゆるませ、誰も見ていないときにはこっそり「ミイ」と呼んでみたりする。

ミイが一週間ほど行方不明になったときは、もうえらい騒ぎになった。ある日、いつものようにふらっと散歩に出かけたまま、帰ってこないのだ。山田の奥さんはおろおろして「ミイ、ミイ」とそこらじゅうをひがな一日探し回っているし、旦那さんは尋ね猫の張り紙をいっぱいコピーして、隣町にまで配るやら電柱に張りつけるやら。おばあちゃんはすっかり無気力になって寝込んでしまった。町内では、やれ、猫捕りにやられただの、どこかで交通事故にあっているだの、このごろは平気で生き物を虐待する輩がいるだの、口々に噂しあった。そして、ミイがまたふらっと戻ってきたとき、みんな、ほんとうにほっとしたものだ。よかったよかったと話していると、無神経なことでは有名な小野さんの奥さんが通りかかって、「けつきよく、猫は三年の恩も三日で忘れるっていいいますもんねえ」と笑ったときには、その場にいたみんなが彼女を振り向いてジロリとにらんだ。小野さんはたちまち真っ赤になって、「いやねえ、私も心配してたのよ、ほんとうよ」と何度も何度も言いながら、逃げるようにそそくさと離れていった。

山田さんちのおばあちゃんが亡くなったのは、まだ最近のことだ。新年を迎えても、半分惚けたような状態は相変わらずだったが、腎臓が悪くなったので入院治療していた。けれども、ついにおしっこが出なくなり、そのままの世へ旅立って行かれた。意識のはつきりしていたうちは、いつもミイのことを気にかけていたそうだ。病院には動物を連れていってはいけないことになっているので、山田さん夫婦もさぞや無念な思いをされたことと思う。だが、おばあちゃんは、夢のなかでミイに会っていたらしい。入院が長引き、この冬さいこの雪が降った日の昼下がりに、つきそっていた山田さんの奥さんは、こんこんと眠り続けていたおばあちゃんがぼっかり目をあけて微笑んだかと思うと、こつ言うのを聞いたそうだ。いままでミイと話をしていた、ミイには人間の言っていることがわからないと思っていたけれど、やっぱりちゃんとわかっていた、だって、「お空はそんなに遠くない、目をつぶったら、もうそこがお空だよ」と言うんだから。それからまもなく、おばあちゃんの意味はなくなっても、もうまともな言葉を話すこともなかった。

お葬式の後片付けを最後まで手伝っていた私は、それまでじつにそつなく振舞っていた奥さんが、ひっそりと台所でミイをひざにのせたまま、涙ぐんでいるのを見た。私に、というよりはまるでひとりごとのように奥さんは言った、おばあちゃんがいなかったら、私たちはとうに悲観して、この子と一緒に死んでいたかもしれない。おばあちゃんは、この子こそ神様にいちばん愛されているんだって、そう心から信じてました。私も、いまようやくそう思えるようになりました。

宅配便のお兄さんなど、事情をよく知らない人は、玄関先で山田さんの足元を見ながら言う、「可愛い猫を飼っているんですね」。かつて山田さんはそのたびに、「いいえ、飼

っているんじゃないありません。この子と一緒に生きていくんです」と言い返していた。でも、もう山田さんは何も言わなくなつた。足にまとわりつくすべすべした毛皮を一瞬撫でてやると、「そうなんです、可愛いでしょう、ついこのあいだ一歳になつたんですよ」と微笑んで、受け取りにハンコをつけている。

夕暮れには、役所勤めの旦那さんが帰ってくる。そうしたら奥さんは、玄関をでて通りに立ち、大きな声で呼ぶ。ミイ、ご飯よ。しばらくすると、そんなに遠くないところから、りんりと軽い鈴の音が近づいてくる。さわやかな春風を入れようと窓を開けていた私の耳にも、その快い音は聞こえてくる。かすかに。

了

(原稿用紙九枚)